

令和 8 年度第 3 回仙台若者会議「せんだいユースカウンシル」 議事録

I 会議概要

- 1 日 時 令和 8 年 8 月 6 日（木）16：00 ～ 18：00
- 2 会 場 日立システムズホール仙台 2 階研修室 2
- 3 出席委員 12 名
浅野圭亮委員、及川綾香委員（途中参加）、大井菜摘委員、奥平悠大委員、
加賀春埜委員、河村真実委員、齊藤祐輔委員、佐藤晟也委員、清野綾花委員、
中野柊一郎委員（途中参加）、前田将宏委員、米山萌香委員
- 4 議事録署名人 奥平悠大委員、河村真実委員

II 議 事

1 開 会

○村上事業推進担当係長

本日はご多用のところお集まりいただき、誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまから第 3 回 仙台若者会議「せんだいユースカウンシル」を開会いたします。

本日の司会を担当します、仙台市こども若者局こども若者政策課の村上と申します。よろしくお願いいたします。

開会に先立ち、お知らせとお願いがございます。

本会議は公開で行うこととしております。また、会議録作成のため、本日の会議内容を録音しておりますこと、あらかじめご了承ください。

傍聴される皆さまへのお願いです。会議中の発言や会話、無断での録画・録音等のご遠慮いただき、円滑な会議運営にご協力くださいますようお願いいたします。

本日お配りしております資料は次第のみとなっております。よろしくお願いいたします。

2 アイスブレイク

○村上事業推進担当係長

それでは、グループワークの前に、今回もアイスブレイクとして前回の振り返りを行いたいと思っております。テーマに対して前回どのような意見が出たのかなど、A、B グループ関係なく、3～4 人のグループを作りまして、改めてお話をしていただきたいと思います。進行を齊藤会長にお願いしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

○齊藤会長

いま事務局から説明があったとおり、まずはアイスブレイクとして、前回の振り返りを行って、今日のグループワークに移っていきたいと思っています。

近くの方と3～4人のグループを作って、5分程度話ができたらと思っています。よろしくお願いします。

(各グループにて振り返り)

3 会議での到達点等について

○齊藤会長

続いて、本日の会議における議論の到達点などについて、事務局から説明をお願いします。

○長谷部こども若者政策課長

(資料に基づき「会議での到達点等」を説明)

○齊藤会長

ありがとうございました。こちらを基にしながら議論を進めていただければと思います。

グループ間で進行度合いに差はあるかと思いますが、今日はシート上の「④解決に向けフォーカスする課題」や「⑤解決に向けた施策案」あたりの意見をまとめていく時間になるのではと想像しております。まずはしっかりテーマの理解や課題の部分をグループ内で議論いただければと思います。

早速グループワークに入りたいと思いますが、議事録の署名人は、奥平委員と河村委員にお願いしたいと思っています。

○奥平委員、河村委員

はい。

○齊藤会長

グループワークの最後には、各議論のまとめを各グループで発表いただき共有する時間を設けたいと思います。それでは各グループにわかれて進めていただければと思います、よろしくお願いします。

4 グループワーク

●A グループ「仙台・東北への愛着を背景とした、地域との関わりに関する若者の意識について」

○齊藤会長

10月の発表に向けて、今日と次回第4回会議の2回で最終的にまとめていくというスケジュールになってます。Aグループは本日4名の参加となるため、進め方を相談したいと思うのですが。

○前田委員

こちらの4人の意見を今日まとめたいですね。次回までに欠席の委員にも共有してブラッシュアップをした上で、次回の第4回会議で確定させて、報告資料の作成に取り掛かるという形ですかね。

○齊藤会長

第4回会議では資料を作り始めるところからスタートできるといいですよ。

そうすると、今日はこのメンバーでこれまで出た市外にいる社会人、市内にいる学生の2パターンの施策案を作るところまでいくということですね。

○Aグループ全員

(承知)

○齊藤会長

では、2パターンの施策案を4人で1時間ずつ考えるか、2人ずつのペアになってどちらかのパターンの施策案を考えていくか、やり方はあるかと思いますがいかがですか。

○米山委員

4人で2パターン考えましょう。

○齊藤会長

そうですね。今日欠席の中田委員と中野委員からは事前にそれぞれ考えていただいた施策案を共有いただいていたので、そちらも見ながら進めましょう。

まずは、市内にいる学生の方から考えていきたいと思います。

○奥平委員

中野委員が考案された市内にいる人に特化したファンコミュニティ「仙台ファンクラブ（仮）」や定期的に交流イベントを開催する「仙台愛の集い」は非常にいいなと思いました。社会人になってからこうしたサークルのような組織に加入するのは、個人的に温度差がハードルになると感じていまして、学生の方がハードル低く、加入して仙台の情報を得ようと思いきいますね。とはいえ、一人だと入りづらさはありますし、一人で加入する方は既に相当な仙台愛がある方だと思うので、市外から来た学生にとっては、友達と一緒に入りやすいこういったサークルは良いなと思います。こうしたファンクラブは現状ないのでしょうか。

○東北連携推進課

宮城県で実施する「（仮称）みやぎファンクラブ」や東北観光推進機構が実施する「TOHOKU Fan Club」などがあります。

○奥平委員

今「推し活」が流行っている中で、ファンクラブという響きも学生と親和性がありますよね。

○前田委員

福岡市に福岡テンジン大学という“まちをキャンパスに”という理念をもったコミュニティがあります。福岡市役所も関わっていると思います。様々な学びを中心としたコミュニティで、交流会もやりながらワークショップでしたり、フィールドワークを行っているという取り組みのようです。こうしたコミュニティに、仙台市が関わっていると面白そうだと感じています。

○米山委員

ファンクラブは、わからない団体の方が運営しているより行政に関わっていただいた方が安心して加入できますよね。

○前田委員

そうですね、定期的に講師を呼んでのイベントやワークショップなどを開催すると面白いと思いますね。こうした取り組みが、東京や広島、名古屋などでも行っているようですね。

○米山委員

私は学生に対して、地元にも首都圏に負けないような企業があることを伝えていくことが大事かと思いますし、「この人と働きたい」と思える人との早い時期でのマッチングができたらいいなと思っています。ですので、早期インターン前に職場見学レベルのイベントを行政がバックアップしながら実施していただけるといいのかなと思いました。

学生側としてもガクチカ（学生時代に力を入れたこと）にもつながりますし、中田委員の案にも企業側の課題を学生が解決する制度の提案がありましたが、企業側としても大学生の意見を聴けるメリットもあり、対等な関係性が築ける場となるかなと思います。「地元にある企業」から「〇〇さんが働いてる企業」という見方に変わってくるのかなと思いました。

それから、先ほどアイスブレイクの際に、B グループの委員が、最終的に仙台市が実施する施策に落とし込むという視点の話がされていて、改めて仙台市の施策としてどうかという視点を忘れてはいけないと感じました。

○齊藤会長

そうですね、その視点は忘れてはいけませんよね。

私の方では、若者がコンテンツを作るとか、経験を積む機会を創るのがいいかなと思っています。企業とのマッチングはいいかなと思っているのですが、関係人口というよりは、定住人口への対策かと感じています。仙台から転出するけど、つながり続けるという関係人口に焦点を合わせると、企業と即物的につながるというよりは、自分がここで何かやったとか、前回の会議でも出ました顔が見える関係とか、そういう観点がいいかなと思っています。消費

的に関わるより、一緒に何かをやれたねといった経験値が得られる機会だといいいと思います。先ほど出た課題解決のプログラムについても、企業ではないんですが、それぞれの地域の課題解決とのマッチングでもいいかなと。

それから若者会議がいろんな地域で開催されていて、自分たちの地域の課題やそれに対する解決策とかを 100 人集めて 1 泊 2 日の合宿型で会議をするようなパッケージもありまして、そうした会議とハッカソンを掛け合わせて、例えば学生 50 人と社会人 50 人で一緒に何かやるという経験がいいなと想像しながら来ました。

○奥平委員

初回の会議でもお話させていただきましたが、自分に役割が与えられるといいですね。齊藤会長にお話しいただいた 100 人の会議も、自分がその町の施策に関わることができたという経験は、自分の中で自信になりまた戻りたい理由になる気がしますね。

○齊藤会長

この 100 人会議の施策自体がいいのはありますよね。例えば、この施策を 10 本ほど展開して、100 人の若者を集める。役所のリソースで難しければ、パッケージを委託するという方法もありますよね。

○前田委員

いいですね。現実的な案だと思います。

僕も皆さんと近いですね。何かしらのコミュニティを作って役割を持ってもらうとか。先ほどの福岡テンジン大学のように、例えば自分の得意ジャンルの講師をすとかそうした役割を持たせることで、派生的にサークルや部活のようなコミュニティを作って展開していくような施策だと帰ってきやすいし、施策としてわかりやすいなと思ってます。場所は作れないので居場所となりうる仮想のコミュニティを作ると、市外にいる社会人も、市内にいる学生も関わって、卒業してもまた帰ってこれる理由にもなって、まとめた施策としてどうかなと思ってます。実施の場合には、おそらく委託なのか NPO のような法人を立ち上げるのかいろいろ選択肢もあるかなと思います。

○齊藤会長

そうですね。

観点として、コミュニティを作ることとその中に自分の役割がある、ということですよね。

○前田委員

そのコンテンツが例えば 100 人会議でもいいと思いますし、別のコミュニティを 1 個作ることが、スタートなのではないかと思います。他自治体の施策を見てると単体のイベントですとか、継続してるけど結局イベントの類のもので、そういったものでは意味をなさないなと

思っています。どちらかというイベントといった実体のある施策より、コミュニティのようなものが理想かなという考えでした。

○奥平委員

世襲じゃないですが、代々つないで欲しいですね。サークルや部活はつながりがあるから、たまに後輩たちの様子を見に帰ったりできると思うので。先ほどの単発のイベントはその日で終わってしまうので、学生であればなおさらつながれるものがないですね。

○齊藤会長

後輩の様子を見に行くというのはありますよね。

○米山委員

逆に OB・OG が何しているかを知るきっかけにもなって、そこから関係が広がりますしね。

○奥平委員

市内にいる学生向けの施策としては、一番いい気がしますね。

○齊藤会長

そうですね。それをコンテンツとしてどう表現するかということですね。

大学、サークル、ファンクラブ、会議なのか。

○米山委員

ファンクラブはいいなと思いましたね。ユースカウンスルや会議となると固いイメージがある気がします。軽すぎますかね。

○齊藤会長

中身を表す名称がいいですね。

僕はファンクラブ事情あまり知らないのですが、どういったものかイメージがついていないので。

○前田委員

僕もです。神様みたいな存在がいて、それにみんなが集うイメージ。

○齊藤会長

何かしらの利益が得られるような。

○奥平委員

特典とかですね。好きなものが共通していて、つながれるということが大きいと思います。

○前田委員

仙台市をマスコットとして中心にした場合に、続くイメージが湧かないですね。

どちらかというと、コミュニティの空気感を好きになってもらう方がいいとは思っています。

○奥平委員

熱量に差があるとファンクラブは厳しいと思いますね。

○米山委員

役割を持つという面でもファンクラブは難しさがあるかもしれないですね。

○奥平委員

委員会だと固いですしね。サークルやインカレ、この辺りが学生からすると親しみやすいですね。

○齊藤会長

学生にとってのインセンティブを、ガクチカのための経験を積むところにフォーカスするのか、もう少し即物的に情報を得られるところにフォーカスするのかによって、目的や中身も違ってきますよね。

○奥平委員

先ほども話題に出ましたが学生と企業のコミュニティだと、就職が目的になって定住人口寄りの施策になりそうな気がしますね。

○東北連携推進課

単発で終わらない1つコミュニティを作ってその中で役割を果たすというお話は非常にいいなと思って聞いていました。まさしくそうした動きが今、他の自治体でもあります。

また、こういったコミュニティとするかでいくと、例えば芸能人が芸能界の仲間を集めて、〇〇県人会という形で、東京で交流の場を設けることもあると思うのですが、空気感を好きになってもらいたいという話もありましたので、そうした緩いつながりや集まりを作るのもいいなと思って聞いておりました。委員の皆さんで、掘り下げていただければ、方向性としていいのではないかと考えております

○齊藤会長

方向性は悪くなさそうですね。

○前田委員

僕の知り合いがリトルフクオカというコミュニティを始めまして、東京で福岡のイベントや

飲み会などを開催しているんですが、そのコミュニティが今もどんどん大きくなっていて著名な方も参加される規模になっているようです。（写真を投影しながら）こんなに東京で集まってるようです。福岡に関わる人だけでなく、関わりたい人も対象としてますね。

○齊藤会長

市外にいる社会人向けのコンテンツとして良さそうですね。

○前田委員

スタートは学生が運営していたので、大学生も関われるコミュニティになっていると思います。

○米山委員

学生と地域のマッチングが関係人口に直結しそうというのはとてもわかるのですが、具体的なイメージが持てていないです。企業とのマッチングですと具体的な企業をイメージできるのですが、地域とのマッチングはどのようなイメージでしょうか。

○齊藤会長

現行の地域課題があって、その課題を取り扱ってる団体などに手を挙げてもらう。例えば秋保温泉街の地域にどうやって人を呼び込むかといった課題を提示していただき、その課題に対して学生が 100 人集まって、グループに分かれて一晩かけてアイデアを練っていく。それが実際採用となれば、その運用するところまで学生が行う、という仕組みであれば、関わりのグラデーションが広がると思いますね。この仕組みを企業でやってもいいような気がします。

○前田委員

いいコンテンツですよ。

○米山委員

地域課題を仙台市に出してもらう、というのもありますよね。

○齊藤会長

市に出してもらうといいかもしれないですね。

僕は昔、高校生対象の TOMODACHI プログラムという高校生 100 人を連れてアメリカに行くプログラムのお手伝いをしてたことがあったんですよ。このプログラムはアメリカの大学と連携をしているんですが、その市長に来ていただいて、地域の課題、困りごとを提示してもらい、学生がグループに分かれてフィールドワークしながらアクションプランを考えて、最後に市長へプレゼンテーションをして終わる Y-PLAN というパッケージのものでした。そ

して、自分たちの地域に帰ってからも、ここでの経験を生かして活動するというプログラムでした。

○奥平委員

今お聞きして思ったのは、ボランティアだと大学生のガクチカに直結しますし、参加したい学生がたくさんいるんですよ。仙台市のサークルのようなコミュニティを作って、そこに地域の方からの困りごとなどを提示して、それを見た学生がそれぞれ出向いて、例えば収穫であったり、イベントの交通整理であったりをボランティアとして活動できればいいかもしれないですね。コミュニティをそうした情報が集約してる場として、困っている地域の方とコネクションできる空間にすれば、地域の方々も助かると思いますし、学生も地域の方と必然的にマッチングできて、今後のつながりを育める空間になるのかと思いました。

僕自身、普段ボランティアでこどもたちと関わっていますが、ボランティアへのニーズはたくさんあって、ただ、賃金を払わなくて済むという理由で、ボランティアという名目でお願いするということも考えられるので、その線引きという意味でも、行政が間に入ってチェック機能を果たしていただきながら、そうした情報を受け取れるコミュニティにできたら学生にとってハードルも低く参加しやすいですね。

仙台市のサポセン（市民活動サポートセンター）で、ボランティア情報を扱っていただいていると思うのですが、おそらくサポセンの中でサークルのようなコミュニティは存在していないと思います。ボランティアの情報を欲しい人が自分でサポセンに出向くことはあると思うんですが、そこまでしてボランティアの情報を取りに行くのはハードルが高いと思いますし、ボランティア活動によって得られる社会経験がたくさんあると思うのでいいのかなと思います。

○前田委員

学生のボランティアへのニーズが高いのはどういった理由なんでしょうね。

○奥平委員

大学生は人によっては時間があるので、いろいろな経験を積みたいという理由だと思いますね。

○前田委員

それはアルバイトとかではないんですね。

○奥平委員

誰かのために、というのが楽しかったり、嬉しかったり、やりがいだったりに感じるんだと思います。僕も、地域の町内会に混ざっていただいてお祭りのお手伝いもしますが、それもボランティアきっかけでつながった縁で、そうした活動で仙台を好きになったというのがあ

るので、地域と学生と利害が一致しているのではないかなと思いますね。

○米山委員

私も大学生のとき、ボランティア活動をしたいという子が多かった記憶あります。たしかに何で単発バイトじゃなくてボランティアなんだろうと考えると、ボランティアをした、参加したという経験や実績が欲しいのかなとも思いました。履歴書にもかけますし、アルバイトとは少し違う印象があると思います。LinkedIn（リンクトイン）でもボランティアの枠があるくらいですし、ボランティアの実績というのは学生にとって大事なかなと思いますね。

○前田委員

学生の皆さんはガクチカとして書ける内容を求めているんですね。

○齊藤会長

それはあるかもしれないです。

○奥平委員

お金をいただくとなると緊張しませんか。お金に見合った頑張りをしないとといった。でもボランティアに関しては、もちろん頑張るんですけど、そのハードルはとても低いかなと思うんです。お金をいただくことを前提としてないので、体験とか経験を得るという目的の方が参加しやすさはあるかなと思いますね。こどもとボランティアで遊ぶのと、5,000 円いただいて遊ぶのでは、ちょっと力の入り方が違うというか参加しにくい感じがします。

○齊藤会長

ボランティアは、前回話題に出た顔が見える関係を作るといった観点で企業とのマッチングよりも刺さりそうなイメージがあって、地域のおじいちゃんおばあちゃんと関係が形成されそうという点でいいなと思いました。一方で、これだけボランティアがたくさんある中で、既存のボランティアの仕組みと、今、話している仕組みは何が違うのか少し気になっています。

○米山委員

普通のボランティアだったら一方的に奉仕して終わりだけれども、今回のものは双方にメリットがあることが少し違うのかなと思いました。例えば、企業とのマッチングの話になりますが、企業側の困りごとに対して学生はボランティアで手伝って、企業側は例えば最前線で頑張っている社員と話ができる場を設けるなど。

○齊藤会長

大学にもボランティアサークルがたくさんあって、ボランティアセンターという仕組みもあ

る中で、大学のそうした仕組みを使わずに市の仕組みを使うのは、こういったアプローチなんでしょうね。

○奥平委員

市が間に入っていると安心はしますね。募集内容として、1回確認してもらってるというのは大きいと思います。それから、通っている学校以外の人との交流というところを魅力に感じてますね。私の所属するボランティア団体でも、他の大学に通う人とのコネクションが欲しいということで、今 9 つの大学の学生に参加していただけてます。仙台市に関わってもらう理由としては、安心と、他の大学に通う人ともつながりができるというのは大きくあるのかなとは思いますが。

○前田委員

仙台市に関わってもらうことと、全大学と連携をすること、それからボランティアに参加したら完了書をもらえるといったステータスを作る、といったところまで作り込むことができれば、違いは作れそうですね。

○奥平委員

ボランティア情報を発信してる場所はたくさんあると思うのですが、先ほどお話ししたサークルのような形で、常にその情報を受け取れる空間やコミュニティはなかなかないかなと思っています。大学のボランティアセンターでもボランティア情報は流すけど、学生に一方的に流してるだけで、ボランティアに興味ある人たちが集まったコミュニティに情報が流れる仕組みというのはまた違うところかなと思ってます。ボランティアに興味ある人たちが集うコミュニティがあったら魅力的だなと思います。

○齊藤会長

今奥平委員にお話しいただいたコミュニティ感は重要だと思ったときに、ボランティアのメニューがたくさん用意されていて、各自がそれぞれ興味のあるものを見つけていく仕組みだとコミュニティにはならない気がしますよね。みんなが一斉に集まって、一斉に決まった期間でどこかのボランティア活動をして帰ってきて、そこで経験を共有するような仕組みにしないと横のつながりができないなと思いました。

例えばですが、秋保から 1 件、泉区から 1 件、沿岸から 1 件、ボランティア要請があり、学生が 10 人ずつ行ったとして、そこで、地域の人たちと顔の見える関係ができて、地域とのつながりができると同時に、10 人ぐらいのコミュニティができる。それを各グループ間で共有すると 30 人のコミュニティに拡大する。というイメージはできるかもしれないですね。

それからこのボランティアの話を企業とのマッチングの延長線上に置くのは危険だと感じていて、ボランティアと営利企業の相性が悪いと思いますし、営利企業の困ったことをボランティアで解決となると、まず見え方としてあんまり良くないと思うんですね。それを主導す

るということも良くないと感じています。ですので、地域課題の解決の方がよさそうな気はしますね。

○前田委員

例えば青年会議所や商工会といった経済団体が行っている、お祭りの次の日の朝掃除とかのボランティアだと、参加する経営者とのつながりができるかもしれないですね。企業に対して奉仕しているわけではないので、先ほどの見え方の問題もクリアできる気がします。花火の後処理とか、よくボランティアありますよ。

○奥平委員

例えば収穫作業のボランティアなど、わざわざ学校にまで募集を出すほどではない案件なども含めて、仙台市が行うコミュニティで流すという仕組みは市にしかできないのかなと思います。

○齊藤会長

仙台市にしかできない、かつ、仙台市にもう少しメリットが欲しいかもしれないですね。これで関係人口増やせませすという話だと、それ以上に手間がかかる施策になってしまうかもしれないですね。

例えば、仙台市の各エリアから、1つずつ地域の課題を挙げていただいて、それに対して一斉に解決に向けて活動するというものだと、仙台市が旗振って、課題解決しますという見え方になるかもしれないですね。

○東北連携推進課

今お聞きした話は面白いなと感じています。例えば今のお話を東北に広げて、東北の各自治体から1つずつ地域の課題を挙げていただいて、それを解決するために、仙台市で作ったコミュニティに参加した方を派遣するという仕組みだと、東北での関係人口づくりと役割のよいものを持たせられるのかなと思いました。

○齊藤会長

ここまでの議論を整理すると、役割とコミュニティをつくることが前提で、そのコンテンツをどうするかという議論をしていて、分岐としてガクチカか就活かの2つがあると思っています。ガクチカだと、ボランティアの観点、就活だと、企業とのマッチングのような観点で進みそうな感じですかね。

この分岐をどちらに舵を切るかで、コンテンツの作り方やカウンターパートが変わりそうですかね。

○米山委員

ガクチカと就活で分かれていますが、結局ガクチカは就活のためでもありますよね。

○齊藤会長

それはありそうですね。

○奥平委員

コミュニティの名称ですが、私の通う大学では、3年前にボランティアへのニーズが増えてからボランティアセンターという名前ではなく、1つ1つボランティアをつなげる駅という意味でボランティアステーションと改名してまして、ボラステと呼ばれてます。

○米山委員

名称は、次回の会議に議論しますか。

企業とのマッチングはやり方として難しいということですよ。

○前田委員

特定の企業だけへの直接的な施策は難しいと思いますね。

○齊藤会長

ボランティアという言葉を使わなければ、地域の企業をいくつか集めてマッチングするような施策はできる気がします。

○前田委員

例えば地域の企業を集めて、地元就職してもらうためにはどうしたらいいかのワークショップを企業と学生で行うようなものと、特定の企業への利益にはならないので、できる気はしています。

○齊藤会長

そうですね。どちらかというと人材系の企業が実施した方が相性はいいかもしれないですね。

○前田委員

これまでの議論の方向性はいいなと思っていますので、あとはどのように仙台市の事業の提案としてまとめていくかですね。これまで出た意見で、役割や関係性は作れると思うので、市が行う意味という部分を議論できれば、良さそうな気がしますね。

○齊藤会長

そうですね、市が行う意味と考えると地域の課題解決が強いのかなと思うのですが。

○米山委員

それこそ東北まで広めるとなると仙台市でしかできないんですよね。

○齊藤会長

例えば青森の地域の課題を聞いて、肌感があるかという懸念はありますか。

中身はもう少し詰めるにしても、地域とのマッチングにふってもいいかもしれないですね。

○奥平委員

今、市内にいる学生に対しての施策を考えてと思うのですが、次に議論する市外にいる社会人の困りごとと、ボランティアをしたい学生をどちらも参加できるコミュニティだと1つで解決できそうですね。

○前田委員

そうですね。先ほど話題に出した、福岡テンジン大学のようなコミュニティにすべて集約してしまえば1つでどちらも解決できるかもしれないですね。

○奥平委員

市外にいる社会人から市内にいる学生に依頼したい案件をたくさん出してもらって、マッチングするような仕組みだと、少々強引ですがどちらも解決できるのではと思いました。

(中野委員途中参加)

○奥平委員

今議論しているボランティアサークルのイメージとしては、ジュニアリーダーが一番近いです。

○中野委員

ジュニアリーダーは各区にありますよね。

○奥平委員

そうですね、ジュニアリーダーは周りでも結構参加してましたね。ハードル低かったなと今思いました。ジュニアリーダーの流れでそのまま大学版のジュニアリーダーみたいな感じで流し込めればいいなと思いました。

○前田委員

ジュニアリーダーの文化はなかったですね。

○中野委員

先ほどまで、仙台市のまちづくりの審議会（協働まちづくり推進委員会）に参加させていただいていたんですが、仙台市のさまざまなまちづくりの（令和7年度）施策の実施状況をABC評価するという中で、ボランティアの項目はC評価でした。

○米山委員

なぜですか。

○中野委員

（仙台市社会福祉協議会の）仙台市ボランティアセンターへの登録団体数を目標として定めていますが、到達できていないということでしたね。

もしかすると仙台市としてボランティアは課題でもあるのかもしれないです。でも学生としてのニーズはあるんですよね。

○奥平委員

ジュニアリーダーは入っているだけで、いろいろなボランティアに参加できましたからね。

○米山委員

ジュニアリーダーにはどのように加入するんですか。

○奥平委員

僕の時は、小学校経由でチラシが届いて、申込書のようなものを作成して提出する形でした。

○中野委員

研修もありますよね。その研修で認可されないとジュニアリーダーになれないんですって。

○奥平委員

下級、中級、上級みたいな形で分けられるんです。

役割感はとてもありまして、僕自身も役割があったから参加していました。

○齊藤会長

やはりボランティアメニューが並んでいて自由に参加していいよというコーディネートではなくて、そうしたコミュニティに参加しているみんなが集まって研修を受けるとか、段階を踏むとか、そういったものがあるとコミュニティ感を上げるのかもしれないですね。私達ジュニアリーダー、という意識にもつながりそうです。

○米山委員

市内にいる学生の議論を続けますか。

○齊藤会長

市内にいる学生向けの施策としてボランティアの方向でよければ、中身のところは次回までの宿題として、ここからは市外にいる社会人向けの方に移りますか。

○A グループ全員

(承諾)

○米山委員

私はゼロイチで案を出すのが得意ではないので、データだけ持ってきたんですけど、Uターンが多い都道府県を調べたところ、宮城県が20%に対して、沖縄県、宮崎県、島根県が40%と高い数値になっていて、県民性もあるのかと思ったんですが、その3県が実施している施策を見ると金銭的な支援なんですね。戻ってくる人に対する支援金が大いなので、外にいる人からすると、大事なのかなというのは感じました。

仙台市の方から情報提供いただいた CROSS SENDAI の取り組みも見させていただいたんですが、YouTube ショートや TikTok の展開などで、ハードルを低くすることもあるかと思いました。とてもいいプラットフォームだと思うので、有名な方だけじゃなく、町の〇〇さんのような一般人を取り上げるなど、今あるものをもっと生かしていくという形がいいかなと思いました。

もっとコンテンツ量を増やしたら、経営者や社会人の方も取り込めると思うので、CROSS SENDAI に力を入れるのも良いかなと思いました。

○齊藤会長

学生が経験とかをインセンティブにするのに対して、お金のような即物的なリターンが欲しい感じですね。

○中野委員

海外の事例も面白いなと思ってしまして、オランダの City Makers Network などは、行政の取り組みに対してオンラインでこうした方がいい、こういったこともできるのでは、といったコメントができる仕組みでして、この仕組みにプラスしてふるさと納税のように税額の控除や返礼品といったコメントするメリットを与えるということも考えられないかなと思いました。

それから、気仙沼市がクルーカードという自治体単位のポイントカードのようなものを作成していて、買い物するとポイントが貯まってそのポイントをお店などで使えるようです。それにヒントを得て、仙台市との関わりに応じて特典が付与されるデジタル上のファンカード

のようなものかどうかと思いました。

最後は、メディアをつくる案にはなりますが、仙台の名所を深掘りできるメディアがあってもいいのではないかと思います。仙台の説明をしてと言われると難しくて、例えば仙台城址、だけで終わってしまったり、もう少しそのストーリーを語れると、市外から来る人に紹介しやすくなる観点はあるかなと思いました。

○齊藤会長

最後のものはコーディネーター養成のような感じですね。

○米山委員

年に1回、宮城検定がありますよね。ガイドしたい方はこの検定を取っておくといい1つですよ。

○奥平委員

蔵王町にもありましたね。

○齊藤会長

僕が調べてきたことも共有すると、1つは秋田県五城目町というところで実施しているシェアビレッジという事業です。この事業の立ち上げのときのクラウドファンディングが面白くて、村民を1000人募集するということで始めてるんですね。応援してくれた人を村民扱いするという話なんですけど、応援金額によってゴールド村民や、シルバー村民という段階を設けた上で、何を享受できるかという、都会で疲れてませんか、地域には田舎があるよといった話をもとに、年貢という年会費を3,000円納めてくれた人は、寄り合いという名の東京での飲み会に参加できる。これは仙台以外の地域で、仙台ファンのコミュニティを作るという観点ですよ。あとは、里帰りというコンテンツで、みんなで一齐に訪問する機会を作ります。例えば、1次産業で人手が必要な時期に開墾ができます、とか一揆というお祭りに参加できます、というような全体のパッケージにして年会費を集めて、ファンコミュニティを作っている。これを、仙台市が実施するのかといったところが説明できて、パッケージとして落とし込むことができればアイデアの1つになるかなと思いますね。

○奥平委員

学校版のものを見たことがあります。廃校となった学校のプロジェクトがあって、応援してくれた人に生徒手帳のようなものを渡して、廃校に遊びにきてもらうといったものでしたね。

○齊藤会長

もう1つは、山形県西川町というところでデジタル住民票NFTという事業を実施していて、いわゆるデジタル住民票を1000枚限定で販売してくれて、インセンティブはそこまで大きく

ないんですが、まずデジタル住民になれるということ。あとはオンラインのコミュニティに参加できるのと実際に来町するとコワーキングとか使えるというくらいです。参加してくれた人は仙台市の資源を使える、といった仕組みはできるかと思いました。

いずれにせよ、コミュニティの話は先ほどと一緒にかなと思いますが、よりお金を払って対価を受け取れるといったことがきっかけになる、加えて事例のように田植えや資源が使えるといったように、仕組みの中に仙台に帰ってこれるものがあるといいなと思いますね。

○米山委員

似たような事業だと、中田委員から交通費を一部補助しながら同窓会を兼ねて帰省を促す事業の案がありましたね。それから、前田委員から話のあった、福岡テンジン大学やリトルフクオカといった事業も共通部分がありそうです。

○齊藤会長

そもそも宮城県人会は存在してるんでしょうか。

○中野委員

ありますよ。東京にコミュニティがあります。

○前田委員

個人的にもそういったわかりやすいコミュニティや飲み会、集まりがあれば行きたいなと思いますね。誰かが帰省するのと同じタイミングで帰省するとか。そうすると、誰かが帰省するタイミングやきっかけを何かしら作らなきゃいけないですよ。

例えば僕だと、講演会とかで呼んでもらうとか、そうしたタイミングで友人を集めて帰省先である福岡で飲み会しようとなります。それから、最近あったのは愛媛にいる経営者が広島で行う講演を、帰省のついでに聞きに行ってみるなど、そうした誰かと一緒に自分も動くことが多いかなと思います。

例えばワークショップなどでも、そのきっかけになるとと思いますね。ただ、そのきっかけを広げるコミュニティは必要ですよ。

○奥平委員

帰省する際に、まだ仙台に来たことない人ですとか、誰か 1 人でも連れてきてくれたらいいですよ。市内で食事するときに使える商品券やクーポンを配布するとか。

○齊藤会長

連れてきた時の食事のニーズはありますよね。

○中野委員

整理したいのですが、元々仙台とゆかりを持っていて今市外にいる社会人を対象としているのか、何もない社会人を対象としているかで、施策が変わってくると思うのですが。

○前田委員

市内から転出した社会人は既に関係人口なので今回の対象から外してましたね。ですので、仙台とゆかりのない市外の社会人ということになりますよね。

そう考えると、先ほどの奥平委員からあった、誰かを連れてくるというのは非常にいいですよ。

○奥平委員

500円とか1,000円でもうれしいですよ。今度友人の実家に一緒に行くんですが、クーポンなどもらえたらなおさら嬉しいですね。そうした制度があると、自信を持って誘えるというものもありますね。地域にお金を落としてもらえますしね。

○前田委員

お昼1回分出るから遊びにこない？というのは本当に言いやすいですよ。

○中野委員

それに加えて何かタイミングを作ればなおさらいいと思いますね。先ほどの齊藤会長からあった一揆のようなイベントでみんなが集まるというような。

○齊藤会長

金銭的支援のみとなると、資源に限界がありますし、単発で終わってしまうかもしれないですよ。仙台市民の税金を、来たことがない人のために使ってるように映りかねない。

○前田委員

たしかに、1回の来仙だけで関係人口と定義できるなら数が増えるのでいいかもしれませんが、有効的な施策かと言われると疑問が残りますね。

○齊藤会長

観光ですよ。

○前田委員

来仙して、そこからまた長く関係を続けられる何かがあればいいと思うのですが。

○米山委員
役割ですかね。

○奥平委員
ゆかりのない外からの働きかけを受けるよりも、友人などから誘われた方が行きたくはなりますよね。

○中野委員
そこに役割などがあればいいんですよね。

○米山委員
役割やコミュニティですかね。

○齊藤会長
中田委員の施策案の中で出ていたアンバサダー制度を、関係人口となる人に付与して連れてきてもらうというのはあるかもしれないですね。

○前田委員
アンバサダーとなることのメリットが欲しいですね。

○中野委員
アンバサダー登録している人が、誰かを連れてきたら先ほど出ていた商品券やクーポンをもらえるとかですかね。

○齊藤会長
お店にメリットがあればできるかもしれないですね。
このあたりを持ち帰って考えた方がよさそうですね。市外にいる社会人向けの施策案はもう少しブレストしてから絞っていく必要があります。

(A グループ：グループワーク終了)

●B グループ「町内会をはじめとする地域コミュニティのあり方について」

○大井副会長
今日は、前回の会議で出た意見と前回以降今日までに B グループの意見記入シート（以下、「意見記入シート」という。）に入力いただいた意見を、グループワークシートの各項目にあてはめていきたいと思っています。それから、前半のうちに④解決に向けてフォーカスする課題を整理して、⑤の施策案の議論ができたらと思っています。

まず、グループワークシートの①目的や理想の姿のところは、仙台市から提示されたとおり、さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態、若い世代が地域活動に参加している状態の2つでいいですかね。

前回の会議で出た課題や施策案のふせんがありますので、どちらの状態を目指すための意見なのか、振り分けてみましょうか。

（前回の会議で作成したふせんを、グループワークシートの各項目に振り分ける作業）

○大井副会長

前回出た意見は振り分けできたと思います。

続いて、「①さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態」の方の課題や現状について、「意見記入シート」に入力いただいた新たな意見を追加していきたいと思います。そもそも町内会によって情報発信の方法や量にばらつきがある、世代ごとに情報取得の手段がわかれている、というところが新しいですかね。それから、会員世帯ではない人がいるという意見もあります。こちら浅野委員の意見ですが、説明いただいてもいいでしょうか。

○浅野委員

はい、会員世帯でないと町内会の回覧などが回らないことで情報が行き届かずに、町内会のことがわからない状態が当たり前になってしまっているという現状があるかと思いました。

○大井副会長

会員世帯以外には情報が届かない課題があるということですね。こちらも追加しましょう。

続いて、「②若い世代が地域活動に参加している状態」の方の課題と現状について新たな意見を見ていきましょう。仕事で忙しくて町内会の活動に参加できる時間がない、活動が活発でない町内会では参加する手立てがない、世帯の形が変わり、関わりが薄いまま大人になって、町内会に参加しないのが当たり前になっている、若者の意見が反映されない、このあたりを追加しましょう。清野委員からは、町内会よりも職場や学校付近で活動する時間が長く、接点やありがたみを感じる機会が少ないという意見をいただいています。

○清野委員

なぜ町内会が存在するのかわからないと、そもそも興味も湧かないのではないかと思います。

○佐藤委員

他で活動する時間が長いというのは現状としてありますよね。学校や職場のコミュニティもそうですがSNSのコミュニティもありますし。

○大井副会長

忙しさと、ありがたみという参加動機の部分が含まれた意見ですね。

それぞれの目指す状態についての課題と現状については出し切れたかなと思いますので、解決に向けてフォーカスする課題について議論できればと思います。

では、「①さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態」で出た課題を見ると、分類として「活動内容や負担感、役割といった知りたい情報がない」「情報発信の方法が求めているものと違う」の2つがあるかなと思いますがいかがでしょうか。

○佐藤委員

たしかに活動内容や負担感などの、本当に知りたい情報が見えないというところが共通していますかね。前回の議論で出た、スーパーや駅、学校などに活動内容を記載したチラシを貼りましょうという意見にもつながってきますね。

○大井副会長

若者の知りたい情報を若者が取りやすい方法で発信されてないということがフォーカスしたい課題として仮置きできそうですね。

続いて、「②若い世代が地域活動に参加している状態」についてはいかがでしょうか。

○佐藤委員

学生の立場からはいかがですか。

先ほど仮置きした課題が解決して知りたい情報を知った状態だと仮定したときに、どうすれば参加できるかというところで考えていただきたいですね。これまで、SNS のコミュニティの方がいい、役員の活動を知った上で負担が大きそうだから参加したくない、若者の意見が反映されにくい、などの意見が出ましたが、どの課題を解決できればハードルが下がりそうですか。

○加賀委員

ハードルを下げることにつながることとしては、自分の意見が反映されることよりも負担が少ないということだと思います。

○佐藤委員

まずは活動内容を知った上で、自分にもできそうだと思えて、負担に感じないような関わり方ができるか、ということですね。例えば、新規参加者には5年間は役員をやらせませんか。

及川委員が以前、新規参加者の若い方々にもどんどん役員を任せている現状をお話しいただいたと思うのですが。

○及川委員

どんどん役員を任せているというよりは、そもそも若い方の母数が少ないので、同じ方が他の地域団体の役員にも就いたり、その方の負担感がどんどん増すということです。

○佐藤委員

若い方の参加者数が増えれば、また変わってくるということですね。

○及川委員

そう思います。新規参加者への配慮もできるようになってくるかと思います。

○清野委員

私も負担が気になるところです。どれだけ加入のメリットがあっても、負担が大きいと躊躇してしまいます。

○佐藤委員

意見が反映されてもそれに釣り合わないコストがかかるなら、参加しづらいということですね。

○清野委員

加入のメリットがあることよりも、負担が少ないことの方が入りやすいですね。

ですので、負担がどれほどなのかを知りたいなと思います。

○佐藤委員

新規で加入される方が負担の不安をなくするためには2つの状態が考えられますかね。

1つは、役員を免除されて役員業務がゼロの状態か、もう1つは仙台市も取り組んでいる効率化の事業で役員の負担が軽減されている状態。でも、役員業務以外の負担も避けたいというともた考えなければいけないですね。

○大井委員

及川委員にお聞きしたいのですが、町内会の組織は、会長さんがいて、役員の方がいて、そのほかにイベントがあるときにお手伝いをしてくれる一般の会員の方がいるんですか。

○及川委員

都度、回覧板などで募集はかかりますが、最後はそれぞれが知り合いの人に声掛けをして決まってくるので結局いつものメンバーになってしまいますね。

○大井委員

そうなんですね。

○浅野委員

先ほど他の活動などで忙しいからこそありがたみがわかりづらいという意見があったかと思うのですが、結局は存在する意味を知っていないからなのかなと思いますね。

○大井委員

ありがたみというよりも、町内会の地域での役割を知ってもらって大事な組織であることが伝われば、もしかしたら気持ちが変わって行動も変わるかもしれないですね。そうなったときに、そもそも町内会に関わるにはどんなパターンがあるのか。加入するとすぐに役員を務めるパターンなのか、先ほど及川委員の話にあった、加入後は応募でお手伝いするという形で関わるパターンなのか。後者のパターンがあることがあまり意識されてない感じですかね。

○佐藤委員

行政の皆さんの視点的に、入ったばかりの人に役員できるだけやらせないであげてくださいのような声掛けというのは、各町内会長さんとかに言えるものでしょうか。

○及川委員

みんながみんな役員やりたくないとは限らないですね。入ったからには、積極的に関わりたい人もいるかもしれないですね。役員になることを断る権利が欲しいですね。

○青葉区まちづくり推進課

若い世代の方にも入っていただきたいという想いは町内会にはあると思いますので、各町内会でも検討はできるんじゃないかなと思います。

○佐藤委員

入ったばかりの人に役員を任せてしまうと、負担を感じてしまう可能性があることを広報するイメージですかね。学生の皆さんとしては、負担がネックに感じているということですよ。

○浅野委員

私としては負担がネックかと言われるとそうでもない気がしています。社会人であれば、仕事をしながらということもあって負担の部分がネックになると思いますが、学生としては自分たちがやりたいようにやれることがむしろ大事で、やりにくさを感じるのがネックになるかと思います。今まで関わっていないコミュニティに入っても、これまでのやり方がある

でしょうし、新しいやり方を提案したところで誰もついてきてくれないといった状態の方が、参加しない理由として強いのかと思ってますので、その状態を解決する方が学生には有効かなと思いました。

○及川委員

それは子育て世帯も同じだと思います。自分がやりがいを感じるものだったら何とかして時間を作ると思うので。意見が反映されにくい状態では、反映されやすい状態と同じ業務量でも全部が負担に感じてしまうので。気持ちの持ちようで負担に感じる、感じないがあるのかと思っています。

○大井委員

若者の中にも、役員になることも含めて、やりがいや手応えを感じながら参加したいという人と、もう少しライトな感覚で、負担を避けて一般会員としてスポット的にお手伝いするくらいの関わりを希望する人と2つの話題が出ましたね。河村委員いかがですか。

○河村委員

積極的に関わりたいタイプの人と、最低限のところで関わりたいタイプの人がいるのが、このテーマの難しいところですね。施策を提案するにあたっては、多岐にわたる町内会活動のどこを維持していくための若者の参加なのか、ということを改めて理解をした方がいいかと思いました。例えば、お祭りなどの生活にプラスアルファとなる部分は、地域に居住していなくても大学などでその地域に来ての方などに任せてもいいと思いますし、安否確認などは、地域の町内会でないと目的を果たせない気がします。その辺りの、町内会が最低限やらなければいけないことが見えにくい現状が、町内会活動をイメージしにくい要因だと思うんですね。ここで課題になっている若者に参加してほしい活動というものが何なのか、改めて整理したいです。もちろん全部だとは思いますが、その全部が難しいという現状があるので、ここだけは参加してほしいという活動があるのでしょうか。そこが見えれば、施策も考えやすくなると思います。

○佐藤委員

町内会活動のうち若い世代の方にマストで参加してほしい活動や若い世代の方に守っていただきたい活動について、行政としての優先度を知りたいということですね。その優先度が高い活動に施策を打っていきたいですね。

○地域政策課

若い世代に限らず、忙しい人が多い、核家族化、単身世帯も増えている、そういった要因で地域の活動を担える方々が徐々に少なくなっている現状で、若い方々にとっては、町内会がどんな活動をしているのかわからない、わからないから参加もしない、という悪循環に

陥っています。ですので、行政側が維持したい活動に対して若い世代の参加の方法を議論いただくよりは、まず地域活動のことを若い方々に知っていただいて、その上でこういう活動があるなら参加したい、それに対して、行政側のサポートとしてこういった施策があるのか、という議論にしていいただければと思います。

○大井副会長

今回は、若い世代の方々に参加してほしい活動を今ある活動の中から選定するというより、どういった活動なら参加できるかという提案も含んだテーマ設定ということを受け止めつつ、幅広く議論できたらと思います。

○佐藤委員

僕だと子どもが小さいので、同じくらいの子を持つ世代が集まるコミュニティがあれば参加してみたいなと思いますね。

○大井副会長

町内会の中にそういったコミュニティがあればそのコミュニティをきっかけに徐々に町内会活動に参加するかもしれませんよね。コミュニティと町内会を切り分けて考えるのではなく、町内会の枠組みのどこかに、という前提で考えた方がよさそうですね。広義の地域活動に含まれてくると思います。

話を戻すと、「②若い世代が地域活動に参加している状態」を考えるときには、町内会活動のいろんな情報を知って、こんな活動ができれば積極的に何かしてみたいと思う層と、佐藤委員のように自分の興味のあるコミュニティとかイベントがあれば参加したり、できることは手伝ってもいいといった負担低めなら参加する層の2パターンがあるという整理ができますかね。

○佐藤委員

負担のない入口形成がされていたら参加したいと思います。

そこをきっかけに関係性ができれば困ってることなどを手伝う気持ちにもなると思います。全く知らない人の役に立とうということは、なかなかないと思うので。

○大井委員

負担感が見えないという課題とハードルが低い参加の仕方が用意されていない可能性があるという入口での課題と、参加した先に自分がやりたいことが反映される仕組みが欲しいという課題に収束されてきますかね。

○及川委員

反映されなくても、受け入れてもらえる安心感がほしいですね。

○大井委員

こうした課題に取り組んでる町内会はあるんだろうなと思うんですが、できている町内会とできていない町内会では、何が違うのか、難しいですね。

○佐藤委員

ここが行政の関わり部分なのかもしれないですね。若者の意見を採用した場合のインセンティブだったり、上手に若者を巻き込めている町内会の紹介ですとか。仙台市で既に取り組んでいる施策などがありますか。

○地域政策課

若者が参加して上手に運営されている町内会の事例紹介として、取材したレポートをホームページに掲載して、他の町内会にも共有しています。

○大井委員

あと、学生のボランティア団体などと希望する町内会のマッチングする事業もされていますよね。若い世代がやりたいこと、できることを町内会が求めていけば受け入れられる仕組みもある。

○及川委員

町内会の組織や活動を大きく変えるということではなく、青年部のような若者で構成される組織があれば、その団体として意見もしやすいし、受け入れられやすいと思いますね。

○加賀委員

大学の授業で調査している町内会では、町内会の班を統廃合することで、1班の規模を拡大して年齢の格差をなくそうとしています。そうすることで、輪番の役員などの負担を減らしているのですが、こうした取り組みは一般的にもあるんですか。

○及川委員

そうした動きは増えてきていますね。一方で、そもそもの母数が減ってきているので、統廃合してもマイナスがゼロに戻るだけでプラスに転じないところもあると思います。

○清野委員

最初から中心部の運営を若者に担わせる必要はないと思っています。町内会の特定の活動を地域の若者がいるサークルなどに任せるとかから始めてもいいのではと思います。例えば、市政だよりは、地域の学校の運動部に所属して走りたい男子に任せて、謝礼を部に対して支払うなど。そうした、若者に任せられる活動を少しずつ増やしていきたいですね。

意見が通らなそうというイメージが課題だとしたら、意見を通す必要がない場を提供するの

も1つかなと思いました。

○河村委員

先ほども話に出た2パターンの層がいると仮定すると、関わり方にいろんな選択肢が欲しいですね。

○清野委員

積極的に運営に関わっていきたいという層は、自分から行動できる人だと思うので、そもそもこの議論の対象としなくてもいい気がしています。

○及川委員

行動しようにも手立てがわかっていない可能性もありますね。

○浅野委員

実際ある町内会のお祭りの運営で人手が欲しいということで参加させてもらったことがあるのですが、私の意見はなかなか受け入れてもらえなかった経験があります。運営をしたいわけではなく、そうしたところで手伝えれば良いと思っているんですが。

○及川委員

意見も採用しなくてもいいから、前向きに受け入れてもらえるだけでだいぶ印象は変わりますよね。

○河村委員

同じ地域に居住していて同じ目的で町内会として集まっているのに、内部で対等に扱われていないということが実質的な問題ですね。でも個人のパーソナリティに関わる課題なので、市の施策として考えるのは違いますかね。

○及川委員

人によってしまうというところですね。ですので、青年部のような組織で活動していく中で、協力できる部分を一緒に活動していくことの方が現実的な気がしますね。

○河村委員

町内会の役員向けの講習もやられてるんですけどよね。

○地域政策課

そうですね。町内会の役員向けに行っている講座では、現役世代の定年延長や共働き世帯の増加などにより日中に在宅されている方が少なくなっている状況の中で、町内会の活動

もアップデートしていく必要性や、若い世代の方にどうしたら参加してもらえるのか、という内容などを紹介しています。

○大井副会長

施策案の話もしていきたいので、入口での課題と自分がやりたいことが反映される仕組みが欲しいという課題の両方を見ていくか、どちらかに絞っていくかを議論していきたいのですが。

これまでに出了た施策案を少し見てみますか。若者と町内会をつなぐマッチングのシステムは、現状あるということですよ。

○加賀委員

ただ、登録している団体と町内会のマッチングのシステムですよ。個人での参加を重視すべきだと思いますし、やり方に課題はあるかなと思います。

○大井副会長

浅野委員からは学生団体と町内会が出会える場作りという提案も出ています。

○浅野委員

今話の出了たマッチングシステムは知っているんですが、学生団体と町内会でお互いのできるこ、求めてるこを直接話せる場がないとズレが生じてしまうと思うので。

○地域政策課

補足させていただくと、話の出ているマッチングシステムについては、全市的な取り組みではなく現状は青葉区のみで取り組んでいるところですよ。

○大井副会長

個人単位のマッチングと、相互のズレを防ぐためにリアルの場でのマッチングの必要性というやり方の工夫の話ですよ。

○佐藤委員

青葉区でやられてる取り組みを今後全市的に取り組む予定はありますか。

○地域政策課

現時点で予定しているものはありません。

○佐藤委員

個人単位でのマッチングシステムは欲しいですよ。

個人マッチングのシステムを構築するとなると、仙台市が独自で構築する、もしくは例えば既存の民間システムと提携して、仙台市町内会の案件も掲載する、という方法が考えられますかね。

○地域政策課

先ほどの浅野委員の話では、お互いの意見が少し合わずにトラブルが生じたという話でしたが、仙台市として個人と町内会のマッチングのシステムを作る際には、仙台市が責任を持つことになるので、マッチングの自由度やそこで生じるトラブルをどう捉えていくかという部分も考える必要がありますね。

○浅野委員

団体と町内会のマッチングにおいては、個人的には行政が間に入ると1つ工程が加わることになるのでやりづらさを感じます。逆に、個人と町内会のマッチングとなると1人对町内会となるため、行政に間に入ってもらえると安心かと思います。

○佐藤委員

仙台市が責任を持ったものに、というのは、これから考える施策全てに通じますね。

○大井副会長

そうですね、大事な視点をいただいたと思います。

話をフォーカスする課題に戻すと、入口でのハードルの課題とその先の自分のやりたいことが反映される仕組みが欲しいという課題はリンクしている気がしています。やりたいことを受け入れてもらえないことも入口のハードルの一種だと思うので。ですので、「②若い世代が地域活動に参加している状態」のフォーカスする課題は、ハードルの低い入口がない、ということに設定していいのではないかと思いますがいかがでしょうか。

○B グループ全委員
(承諾)

○地域政策課

先ほど、仙台市が責任を持つというお話をしましたが、これから施策案を検討いただくにあたっては、ぜひ自由な発想で考えていただければと思います。

○大井副会長

ありがとうございます。

では、施策案の議論を進めていきたいと思いますが、意見記入シートの方に浅野委員から困りごととできることのリストがあるといいという意見をいただいています。

○浅野委員

はい。例えばそれぞれの学生団体ができることなどの特徴を町内会側に知ってもらえるといいと思って書きました。

○大井副会長

これはプラットフォーム上に掲載するイメージですか。

○浅野委員

プラットフォーム上でもいいのですが、町内会の方々がたどり着けるかと考えると難しい気がするので、別の形でも町内会の人を知れる機会があるといいのかなと。

○大井副会長

さっきご提案いただいたリアルな場などもその機会になるということですね。

○浅野委員

そうです。

○佐藤委員

市政よりも活用できないですかね。リストの一覧にアクセスできる二次元コードなどを掲載するとか。

○大井副会長

「①さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態」の方では、加賀委員にもご意見をいただいていますので共有いただけますか。

○加賀委員

町内会の活動が知られてないため広報に力を入れようというところで、市の公式 LINE もあるし、青葉通りの地下道などにイベントポスターが掲示されていたりするので、そういった既存のものを利用できないかというものです。例えば先ほどのマッチングするシステムを構築するのであれば、アクセスする二次元コードを貼っておくだけでも、アクセス数が増えるだろうと思います。

○大井副会長

町内会の活動や仙台市が実施している施策の紹介を、わかりやすい媒体を使って広報していくということですね。

○及川委員

自ら調べなくても目に入ってくるそうですね。

○加賀委員

それから、私自身小さい頃絵を書くのが好きで、自分が書いた絵が貼り出されるのがとても嬉しかったんですね。広報として掲示するポスターを、コンクールにしてインセンティブを与えるという取り組みは面白いかなと思いました。

○及川委員

PTA ではよく取り組んでいますね。

○大井副会長

河村委員からは仙台市のアクティブシニア・ボランティアポイント制度の仕組みを転用できないかという意見をいただいています。

○河村委員

もしかすると、「①さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態」ではなく「②若い世代が地域活動に参加している状態」の方の施策案だったかもしれないのですが、仙台市の事業で、地域のボランティア活動をしたシニア世代に対して、提携するお店で利用できるポイントを進呈する制度がありまして、その対象をシニアだけでなく若い世代にまで拡充するか、もしくは町内会バージョンとして立ち上げることができないかと考えました。ポイ活（ポイント活動）感覚で、加入していただいて活動もしていただけるというところにつながるのではと考えています。

○大井副会長

以前佐藤委員から話のあった、地域のスーパーでの割引など、日常使いのサービスが受けられるといったことですよね。

○河村委員

まさに、そこから着想を得たものでした。

○大井副会長

佐藤委員からは、転居のタイミングで加入した方に、仙台市のごみ袋などのインセンティブを付けるという意見も出ています。こちらも、活動を知ってもらう施策でもあるし、参加してもらう施策でもある感じですかね。

○及川委員

私の町内会では地域清掃に参加したら、燃えるごみ用と燃えないごみ用のごみ袋のセットに熨斗を付けてもらっています。やはりそういったものがあると参加する気になりますよね。

○佐藤委員

ごみ袋は仙台市に住んでいて必ず必要とされるものの1つですからね。

河村委員から出たポイントも、ポイ活でスポット的に参加しようとなりますよね。

○及川委員

若い世代の方々は、タイムイズマネーの意識があると思うので、自分の時間を削るとなるとポイントのようなメリットを用意したいですね。

○佐藤委員

このアクティブシニア・ボランティアポイント制度のいぐすペイは、どのくらい利用されているんですか。

○地域政策課

担当課から聞いている話では、昨年度テスト的に始めて、今年から町内会の活動にも対象を広げているものでして、順調に増えているとのこと。この制度の本来の目的は、シニア層の健康寿命を延ばすというものですが、やはりこうした制度ですので楽しみながら利用しているようです。町内会としても負担はそれほど大きくないようで、スマホで読み取る必要があるので、スマホ利用者が増えたという副次的な効果もあるとも伺っています。

○大井副会長

知りたい情報が若者の求める方法で発信されてないという課題に対する施策案をもう少し議論したいですね。

○浅野委員

現在、仙台市で取り組んでいる Youtube 動画など、大学生はまず見る機会がないと思います。学生はホームページにすらアクセスする機会が少ないので、これまで出たように通学や日常生活で勝手に目に入る地下鉄などに広報した方がいいと思います。

○大井副会長

社会人も同じですよ、ホームページにアクセスする機会も少ないですしね。LINE は登録しますけどね。発信される情報の内容よりも、まずはそもそも求める方法で発信されていない方に重きがありそうですね。

○加賀委員

情報の内容については、実際どの程度の活動頻度があるのか、こういった活動があるのか具体的に欲しいですね。

○佐藤委員

そこがないと参加までつながらないですね。

○及川委員

発信する側も同じ若い世代の人が同じ目線で担当するといいですね。情報担当は若者のポジションとして確立してもらおうとか。

○大井副会長

残りの時間で、施策案の候補を詰めていければと思うのですが。

○佐藤委員

そこを考えると、若者をどこからどこまでと定義しますか。今は学生が議論の中心になっている気がしますが、学生でも仙台に来たばかりの大学1年生を対象とするのか、進路が決まった大学4年生とするのかでも打ち手は変わってくるので。

○大井副会長

そもそも学生が将来必ず在仙すると限らないので、子育て世代などの長く住み続ける人を対象とするのかでも違いますよね。

○及川委員

大学生バージョンと社会人バージョンの両方提案するのもありじゃないですか。

○大井副会長

たしかに、①の情報の届け方については、学生と社会人では行動が全然異なるので、分けて考えた方がよさそうですね。逆に②のハードルの低い入口について、今挙がっている施策は、共通しているものが多いですね。

施策案としては、①の情報の届け方に関して、仙台市が実施している施策の紹介を、もっと目立つ場所に掲示してもらおうということがありますよね。

○加賀委員

ホームページは能動的に見に行かなければだめですけど、公式 LINE ですと受動で見れるので効果的だと思います。

○大井副会長

ホームページは特定の情報を自分で探しに行きますからね。

○及川委員

ホームページの情報量が多すぎて、知りたい情報にたどり着くまで大変ですよ。

○大井副会長

これをまず知ってほしいという情報にわかりやすくアクセスできるといいですね。

先ほど仙台市民なら強制的にタッチする場面で情報を発信するという話も出てた気がするのですが、具体的に何かありますか。

○佐藤委員

順序を追っていくと、まず転入してくると区役所ですよ。それから日常生活だと、スーパー、駅、地下道、大型ショッピングモール、ごみ収集所、ガソリンスタンドとかですか。

○及川委員

ガソリンスタンドでガソリン入れている間に流れる画面をつい見えてしまいます。

○河村委員

掲示する内容をまず考えた方がいいのではないかと思います。町内会への加入を促進するものなのか、活動頻度や負担の少なさをPRするもので、それによって掲示する場所も変わってくると思うので。

○及川委員

活動内容や頻度といった個別の町内会のローカルな情報は、各地区に設置する掲示板がいいですよ。河村委員のお話のとおり、内容によって掲示する場所も変わってきますよ。

○佐藤委員

仙台市に何か所かある子育て支援センターが個別に作成されているチラシを見るんですが、そこに活動内容が掲載されていて、次回この活動するのは何日ですという予告が掲載されていると、そこに合わせて行ってみようとなるんですね。ですので、町内会全体の活動のものを見ても、参加の動機にはならない気がしました。

○及川委員

全体の活動のものと、個別の活動のものの2パターンあっていいのではないかと思います。それぞれ掲示する場所を変えて。個別の活動のものは、戸別配布でもいいと思います。

○佐藤委員

そうですね、シンプルにポスティングはいいかもしれませんね。

○大井副会長

間もなく時間なのでまとめに入りたいのですが、課題の絞り込みまではできましたね。施策の方は、①の若者の求める方法での情報発信については、オフラインを大事にした方がいいということがありつつ、何を発信するか、それによってタッチポイントも変わってくるということですね。②のハードルの低い入口の整理は、仙台市が実施している団体と町内会のマッチングの仕組みの改善版のアイデアや、タイパ・コスパ（タイムパフォーマンス・コストパフォーマンス）時代の若者には、ポイントなどのわかりやすいインセンティブがあるということがハードルを下げることにつながるというまとめができるかなと思いますが、整理はこれからですね。

○地域政策課

町内会の情報をどう届けるか、若者が求める方法で発信されていないという課題や若い人が意外とお店のチラシを見ているという情報など、気づきを得られました。その課題に対して、行政側がどうサポートしていけば解決するのか、施策として議論いただければと思っています。それから、入口のハードルを下げるという課題について、スポット的な参加の話題の中で市政だよりの配布を地域の学校の運動部が担うという提案も、新鮮なご意見でした。まさに地域と学校などをつなぐ役割として行政が関与できるところかなと思っています。スポット参加や動機づけという面についても、行政側がどういう形で関わると効果的かという次のステップの議論をお願いできればと思います。

（B グループ：グループワーク終了）

●A グループ発表

○奥平委員

A グループは前回の話し合いの中で、ターゲティングを将来に向けた関係人口として今仙台にいる学生、今市外に出ている社会人の2つに絞りまして、それぞれの施策を考えました。今市内にいる学生に向けたアプローチとしては、コミュニティづくりとボランティアという話が出ていて、ボランティアをお願いしたい地域の方とボランティア活動をしたい学生をコネクトするようなコミュニティを作れば、学生に役割を持たせられて、将来転出した後も関わってくれるのではというのが出ました。市外にいる社会人へのアプローチは、帰省するときに誰か一緒に連れて帰ってきてもらうなど、そういった人を起点とした施策を考えているところで時間になりました。以上です。

●B グループ発表

○加賀委員

B グループのテーマでは目指す姿が「①さまざまな世代の住民や転居者が地域の活動を知っている状態」と「②若い世代が地域活動に参加している状態」の2つあります。それぞれに解決に向けてフォーカスする課題を、①は若者の知りたい情報を、若者の求める媒体で発信できていない、②は参加するための低いハードルがない、と設定しました。

この課題に対する施策については、①は、若者はホームページなど能動的にアクセスすることが少ないので、例えば地下道やスーパーへの掲示など受動的に目に入るような場所への掲示などオフラインで発信するというものが上がりました。加えて、例えばいろんな人の目に入る場所であれば、町内会の全体的な抽象化した内容になるでしょうし、地域の中での掲示であれば、個別町内会の活動内容などの内容がいいということで、場所によって掲示する情報の内容が違ってくるという話が出ました。その部分は内容と場所について絞り込んでいこうと思います。②については、現在、仙台市では団体と町内会をつなぐプラットフォームの仕組みはあるようなのですが、こちらには個人は参加できないので、個人参加のものといいといった意見が出ました。

今後、施策を詰めていくという段階です。以上です。

○村上事業推進担当係長

ありがとうございました。

最後に齊藤会長より総括をお願いいたします。

○齊藤会長

皆様お疲れさまでした。

これまで議論いただいた内容をこれから形にしていくところに時間がかかるだろうなということを、グループワークをしながら、そして B グループの発表を聞きながら、感じています。これを日々行政の方々が実践されていることがすごいなと改めて思うとともに、改めて私たちが地域に貢献できる手触りのある報告にしっかり仕上げられるといいなと思います。次回まで1か月ほどですが、アイデアを練る日々を過ごしていきましょう。

5 閉 会

○村上事業推進担当係長

皆様、長時間にわたりご議論をいただきましてありがとうございました。次回の第4回会議は、9月1日（火）15時より、場所はスマートイノベーションラボ仙台で開催いたしますので、よろしくお願いいたします。

以上をもちまして、第3回仙台若者会議「せんだいユースカウンスル」を閉会させていただきます。皆様、大変お疲れ様でした。